

にとっては美術品というよりは専門分野の研究書であるし、後者の屏風絵は館長として調査すれば発見できたはずのものである。

それはともかく、貴重書展示室では、平時は、常設展「日本の出版文化」が継続開催されることになっている。展示室開設の時から図書館公開係が置かれるようになったが、これは大学図書館では珍しい係ではないか。

5 図書館ボランティアのこと

図書館ボランティア受入れに関する検討委員会が設置されたのは、就任早々の平成5年4月19日だったが、検討に時間がかかり、図書館ボランティアの公募を開始したのは平成7年3月16日になってしまった。5月30日に発足式が行われ、選ばれた43名の方々に活動時に着用するネームプレートとボランティア許可証を私から交付した。生涯学習に対応した大学図書館サービスを展開するために導入したものだが、国立大学での図書館ボランティアは初めてだということでマスコミや類似の組織などに注目された。

平成7年12月5日には図書館部職員とボランティアの交流会が持たれ、また、平成8年6月4日にはボランティア発足一周年を記念して、記念式を開催し、私が記念講演を行った。今、私の手に「図・ボラの会」広報部編集発行の「うたがき」創刊号(1996.9.2)がある。これには、私も期

待する一文を載せているが、現在も「うたがき」は健在とのこと、嬉しいことである。

6 終わりに

4年の間にはまだまだいろいろな発展があった。平成6年4月には、国立大学図書館協議会関東地区の常任的地区連絡館となった。初めて関東地区の代表的理事館となったのである。平成8年2月には、図書館専用電子計算機システムを更新した。この時は学術情報処理センターの大型計算機との関係調整がいささか大変だった。同年3月には、附属図書館概要(和文・英文)を全面改訂し、また、筑波大学和漢貴重図書目録を刊行した。そして、個人文庫を設置できるように規定を改め、同年10月と11月に、宇野文庫と竹内文庫の寄贈を受けた。また、平成9年3月には、大型コレクション「中国第一歴史档案館所蔵歴史档案資料」を購入することができた。

個人的には平成8年8月12日、集会室で還暦の祝賀会を盛大に催してもらったことが忘れられないし、親睦会による暑気払いや忘年会も楽しかった。この文章には個人の名前は出さなかったが、それぞれの場面で多くの人の顔が浮かんできた。関係者の皆さんには、その場面を思い浮かべながらお読みいただければ幸いである。

(きたはら・やすお 筑波大学長)

開学30周年記念特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」

本学図書館所蔵の貴重書(和書)の中から

大倉 浩

今回の開学30周年特別企画に展示する貴重書の選定を、日本文学の石埜先生とお手伝いしましたが、日ごろは目録や写真でしかお目にかかれぬ貴重書も、改めて実見してみると色々わからないこと、見直しが必要なことが出てき

ます。この機会に、私の専門である中近世の日本語に関連する貴重書について、図録に書ききれなかったことを少し書かせていただき、御覧になる皆さんに何か参考にしていただければと思います。

謡本 二十七番(うたいばん にじゅうななばん：27冊)

慶長8(1603)年，同11(1606)年 観世身愛筆。

謡本とは，能の詞章に節付けを傍記した譜本で，脚本というより，謡を稽古(けいこ)するためのテキストでした。本書は，観世流九世大夫，観世身愛(ただちか，忠親，のち隠居して黒雪とも)筆写になる27番の謡本で，由緒や古さからも貴重な本です。さらに筆写した観世身愛という人物が，徳川家康の後援を受け確固たる地位を得ながら，この本の筆写後の慶長15

(1610)年，突如高野山に籠(こ)もってしまうなど謎の多い人物であり，後年復帰して観世流の詞章の改訂や謡本の刊行(『元和卯月本(げんなうづきばん)』百番)にも深くかかわった観世流の重要人物です。その身愛の前期の謡本ですから，その詞章が後年の刊行のものとのどのような異同があるか，調べる価値のある本です。実際に元和卯月本と比較すると，様々な違いが見られます。また，この本自体が大名家で愛蔵されていたもので，曲名入りの蒔絵の見事な箱がそれを物語っています。



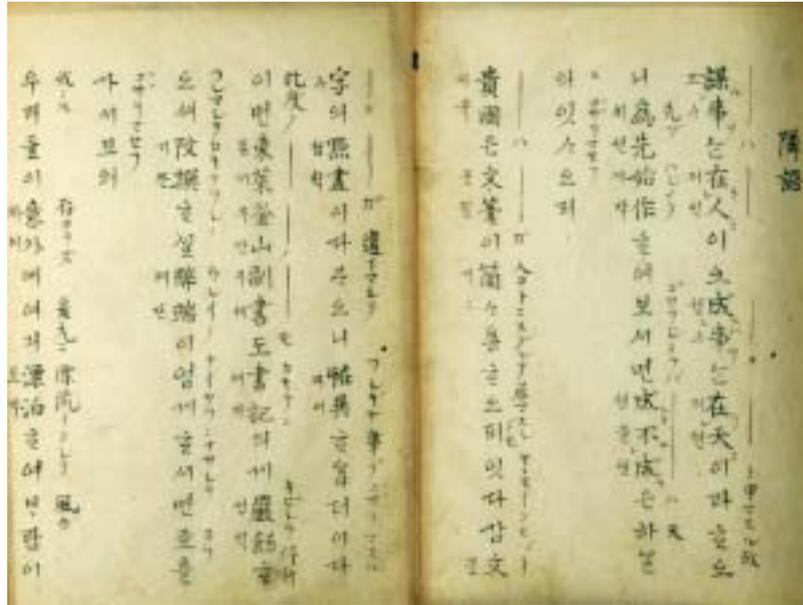
隣語大方(りんごたいほう：1冊江戸中期書写か)

江戸時代の日本人が朝鮮語を学習するために編纂した，日朝対訳の例文集です。李朝正祖14(1790)年に朝鮮で刊行されている朝鮮版があり，日本では本書など，数種が写本で残るのみで，刊行されたのは明治15(1882)年，ただしそれぞれに異同があり，日本版と朝鮮版どちらが先なのかを含めてどのような編纂過程を経て成立したか，不明のことが多い文献です。

その中で本書は九巻完備しており，序文も持つ

ている点でも，『隣語大方』成立の鍵を握る写本といってよいでしょう。ただ，序文にも誤写があるようで，「伝五郎」や「金夢霖」などの人名や対馬藩を中心とした日朝交流史を踏まえての慎重な考証が必要のようです。序文の干支「辛未」も1751年と推定されていますが，果たしてそこまで古いかどうか，疑問も残ります。

また，記された日本語を見ると，
貴国ハ文筆ガ人コトニスグレテ居マスレドモ
ヤヤモイタセバ文字ニ点画ガ違イマシテ フシギ
ナ事デゴザリマスル (巻七)



のように、江戸時代の外交・交易の場でどのような日本語が使われていたのかを知る貴重な資料で

す。

(おおくら・ひろし 文芸・言語学系助教授)

開学30周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」

「速報つくば」の誕生とあゆみ

山崎 敏誉

「速報つくば」構想は、筑波大学創設期の学内広報活動を検討する中で誕生した。

昭和48年10月の開学時、企画調査室準備委員会が設置され、翌年5月に現在と同じ企画調査室となる。当時の企画調査室は、学長と副学長に一名ずつの室員が対応する相談役体制をとっていた。開学時の混乱で、プランニングというより種々雑多な仕事と苦情処理に忙殺されていたとある。そんなさなかでも小冊子「広報筑波」を刊行するなど学内情報伝達の努力を払っていたが、根本的な解決策とはならなかったのであろう。昭和49年9月3、4日に開催された筑波大学長期計画シンポジウムで、学内の不満不安解消の当面の手段と恒久的なコミュニケーション・システムの確立について論じられ、決定された一つに「学内の動きを教職員及び学生に向けて速報する。」があった。

翌月、開学1周年である昭和49年10月1日、「広報筑波」は第4号を発行し任を終える。これ

を引き継ぐ形で、同日「速報つくば」のデビュー。速報性に重点を置き、400字詰め4枚。電話かメモによる情報を基とし編集で手を入れる。土曜日原稿渡し、火曜日配布。発刊番号は100年でも4,000号程度となる通し番号。気軽に読み捨て出来るよう綴り穴を設けない等が掲げられた。報道方針として、「会議の場合は結果もさることながら途中経過を知らせ、意見があれば会議のメンバーに直接連絡を入れてもらう。したがって網羅的に議題を知らせるだけでも良く、それを活用するか否かは個人の問題である。」とあり、途中多少の変遷はあったものの、現在に共通する。

この寄稿を機に初めて見た創刊号。編集後記に「官報的なものでなく、“かわら版”的に編集するので気軽に読んでいただきたい。」とある紙面は、B4判白紙の両面印刷二つ折り。手書きの風景イラスト。速報性重視の週刊。紙面の関係からか活字も小さく印刷も粗い。その飾り気の無い紙面が